課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学　籍　番　号	18DC1608
氏名（本籍）	何　悦馳（中国）
学位の種類	博士（中国研究）
報　告　番　号	甲 第 129 号
学位授与年月日	2024（令和6）年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論　文　題　目	摩登前史：束胸与中国“flapper”（1912-1937）
審　査　委　員	主査　黄　英哲
	副査　塩山　正純
	副査　唐　燕霞

2024（令和6）年2月2日
愛知大学大学院中国研究科

審査要旨：

本博士論文『摩登前史:束胸與中國“flapper”(1912-1937)』はかなり革新的な観点の論文である。本論文の研究対象は、中国民国時期の都市女性の「束胸」と“flapper”についてである。「束胸」を服装の属性としてだけでなく、流行ファッションという面からも着目しており、最終的にこの種のファッションを着用することを選んだ女性たちに関心が向けられ、民国女性の束胸行為と、1920年代の中国において“flapper”が広まっていった過程と、この時期の服飾の変化について探究している。本論執筆者は壮大な企画によって、近代の海外思潮と伝統社会との間で、民国女性が束胸を選択した社会背景、並びに束胸行為の方向性を本論において明らかにしようと試みている。“五四”新文化運動後の新女性の動向について、「束胸」と「反束胸」が広く社会で注目された時期に、“五四”新女性が30年代「モダンガール」に至るまでの重要な歴史的断片を補足するものであり、高い評価と賞賛に値する。

論文は序論と余論を除く三章からなる。第一章「1912-1926年：“flapper”流行與束胸興起」では、主に“flapper”流行の具体的な装いと外観、中国近代において束胸が出現した背景とその原因、及び審美的変化について論じている。第二章「1927-1933年：“flapper”本土化與“天乳運動”」では、外来である“flapper”の本土化(ローカル化＝中国化)問題、及び当時大きな論争となった「天乳運動」問題について研究している。また本章では一節を設けて、同時代における中国の“flapper”と日本の「モダンガール」の比較研究をしており、筆者の広い視野が見受けられる。第三章「1934-1937年：從“flapper”到“摩登女郎”」では、主にモダンガールの前身としての中国の“flapper”について、積極的に社交活動に参加した価値観と、近代女性が公共の場に進出し、社会的活動に参加するためにより多くの可能性を提供したことについて述べている。1930年代以後にジャズの時代は幕を閉じたが、中国女性の自己表現を勝ち取る試みはなおも続いた。最後の余論で筆者は、“flapper”の生活様式と価値観の普及が、客観的に女性の解放を促進したと指摘している。中国の“flapper”は、欧米や東アジアの近隣諸国の女性たちと同じように矛盾を抱えていた。しかし、いずれにせよ前時代に比べて開放的な社会の雰囲気のもとで、男女の性の垣根を打ち破り、女性は家庭から出て、より広くさまざまな社会活動に参加し、女性に対する公共の場の制限が緩和されたことは確かである。“flapper”は自由恋愛や独身主義を主張した。また、この時期の女性解放思想が呼びかけた家庭からの脱出という考えと結びついて、伝統

的な恋愛観や結婚観にも挑戦することとなった。さらに、“flapper”の流行は同様に先鋒的な意義ももっており、新しい装いの流行、短髪のイメージや髪を切る行動は、伝統的な女性のイメージに対する反抗でもあった。流行が瞬く間に過ぎ去っても女性が選択した空間の拡大はそのまま残り、中国式服装と新たな流行が結合していく過程で、中国の“flapper”は驚くべき創造力をあらわした。伝統文化と西洋の流行が衝突する中、絶えず女性は積極的に自己表現を勝ち取ろうとしたことも明らかにしており、優れた見解であると言える。

総じて本博士論文の革新的なところは、以下の４点にまとめられる。

一、本論文のテーマに関連した現存研究では、「モダンガール」と“flapper”との間の区分けが特に明らかにされていない。学会では30年代の「モダンガール」への関心は比較的多いが、その重点は反モダンの風潮の研究にあり、例えば最近逝去された日本人研究者の坂元ひろ子や、中国人研究者の白蔚、姜雲飛は、1920年代の“flapper”について簡単に触れるものの、これと「モダンガール」は同じものとして同等に論じており、“flapper”という独立した流行スタイルとして区別してはいない。本博士論文では、1920年代の“flapper”は一つの独立した流行としてとらえている。中国近代服飾が、清代を経て最終的にいかに民国の流行の鍵を確立したかという過程において、その前後をつなぐものとして、“flapper”は独自の意義を備えていると考え、これに対して詳細な分析をしている。

この他、既存研究では、「束胸」や“flapper”と、その背後の変わりつつある中国社会との深層的なつながりについては簡単にまとめているが、「天乳運動」と“flapper”の関係についてはあまり注意していない。本論では、それに対して全面的に深く検討を加え、あわせて、この時期の「天乳運動」と、胸を小さくして自然な曲線を主張する“flapper”流行との関係について注目している。1920年初め、“flapper”という装いが中国に入ったちょうどその時期に「天乳運動」が展開された。“flapper”の着用姿は中国式の伝統的服装と平板で直線的なスタイルという点で似ているため、審美観の新旧交代の段階は控えられつつ、新しい装いを渇望する中国女性に歓迎された。そして素早く本土化され、中国式婦人服のデザインに影響をあたえ、西洋式のコルセットは胸を開放する女性に新しい下着という選択を提供した。偶然にも 1920 年代の日本でも、同様に欧米のジャズムードの影響を受けた「モダンガール」（通称モガ）が誕生した。既存研究では、束胸と“flapper”の流行と、西洋や東アジア諸国、その他地域の関係に着目するものは少なく、同様に中国の“flapper”と日本の「モダンガール」に

対する対比研究も乏しい。本論は国際的な視野を用いて、同時代の西洋と東アジア女性を対比することで、国際的な流れの影響下において、女性たちが外来の流行を本土化していく様子を明らかにしている。

二、「天乳運動」を歴史事件として注目する人は多く、既存の研究では後人のために束胸行為の基礎的研究を提供しているが、束胸過程に対する系統的な研究は少ない。発展のそれぞれの時期については明確に区別されておらず、束胸行為は発生、発展から消滅に至るまでの時間的な手がかりはあいまいで、またこの時期に流行した“flapper”といったスタイルやそれとの関係には着目していない。本論は、民国初期の都市女性の束胸現象を、“flapper”が中国沿海部で流行したことを背景にして考察する。近代の社会思潮が激動の変革時期とからみあい、束胸という行為の発生から発展、消滅するまでの複雑な変化の過程を明らかにしようとしている。それは発生から流行、消滅に至るまで、民国建国から抗戦開始前までの三十余年の時を経た。その間には「天乳運動」と「新生活運動」の二度の政府主導による行政の関与を経て、社会の審美的ブームは「長直痩弱」から「曲線健美」へと変化した。海外からもたらされた“flapper”は中国に入って徐々に本土化し、旗袍等のアウターは絶えず変化し、インナーは大きな変革を経て、現代の下着が中国へと輸入された。筆者は以上のような斬新な見解を提出している。

三、本論は、女性は性別の特徴の差異をなくすために束胸するという、現存研究の観点に疑問を呈し、束胸を主とする五四“新女性”と、婦女解放運動との間に矛盾が存在したのか否か、欧米の“flapper”にみられる「メンズスタイル」は、中国にまで普及することができたのか否かについて整理し、考察を加えている。

筆者は、1926年に中国では確かに女性が髪を短くし、束胸して装飾をとりのぞき、長袍を着る、性別がわからないような扮装があらわれたが、現存する一部の資料には、伝統観念によって「新女性」が知らぬ間に感化されていた影響が示されていることを明らかにしている。筆者は、近代女子の束胸の原因とその過程は非常に複雑で、確かに1920年代後半の中国の近代女性解放運動において、「メンズスタイル」のような束胸は存在した。しかし、束胸行為の由来は、決して現代の研究者が推測するような、性別の特徴を排除して男女平等を追求するというものではなく、その誕生も民国初年の保守的な社会環境の中で、民国建国後に西洋から入ったファッションに対する女性の一つの反応であったと指摘する。当時の女性の服飾はダーツをとる方法を用いていなかったため、衣類の裁断技術の限界が現代の衣服を制約していた。しかも社会ムードは依

然として保守的であったため、女性は束胸することによって身体の曲線を過度に強調して人目を引かないようにした。筆者はまた、女性自らがこのような隠すことを旨とする束胸行為を選択したのだが、その発展の中で次第に流行のものとされるようになり、同時に小馬甲に性的魅力を持たせて男性の美意識を引きつけ、社会世論の関心と議論を引き起こしたということが、現存する資料にあらわれていると指摘する。そして1920年代後半に、女性解放思潮の影響を受けて、男性化を目的として束胸する女性があらわれたが、反束胸の言論によって隠蔽され、束胸は解放を阻む象徴へと変化した。その背景には、伝統観念と近代化が衝突した社会と、女性の発言が反映されない社会世論や、当時の婦女解放運動の限界と、“五四”新女性の保守的な面があらわれている。また、女性の自己表現と流行の選択も見逃してはならないが、これらには限度があり、また保守的で常に干渉され無視されて、下着のようなものでさえ女性自身が自分で決めることができなかったとする。以上のような筆者の発見と論述は評価に値する。

四、既存研究では、束胸が消滅した原因とその過程は諸説入り乱れている。中国人研究者の劉正剛、曾繁花の研究では、「天乳運動」が束胸反対に効果的な役割をしたとし、束胸消滅に対する政策の影響について注目し、あわせてその効果の限界について結論を得ている。研究者呉小瑋は、「天乳運動」のなかで、新しい形の下着が導入されるにつれて、豊乳という新しい観念が樹立され、束胸行為が一般に抑制されるようになり、豊満で健康的な美しさが新しい審美観として伝統的な審美観にとって代わったその力について提示している。

しかし、本博士論文が提出した新見解では、女性の下着改良は胸を開放するか否かという問題の根本的部分であり、社会の美的価値の変化によって作り出された新しい審美観念こそが則ち女性が放胸を選択する外的条件の一つであったとする。この関係について、本論執筆者は、纏足風俗が最終的に消滅したのは、それが違法行為になったからでもなければ、身体の健康を損ねるからでもなく、それは過去のこととみなされ、旧秩序が崩壊し新しい秩序が打ち立てられるに従い、それが担ってきた価値や文化的意義を支える環境を失ったからであるとする。筆者はさらに、平たい胸のボディラインを尊ぶ“flapper”の流行は、基本的に「天乳運動」の時期と重なっており、あたかも「天乳」提倡者が追求した、自然で胸部を誇張しないシルエットと符合していたとし、“flapper”たちが着用した胸当ては、当時放胸をやめた女性のために新しい下着の選択肢を提供したことを明らかにした。1930年代以後、社会の美的価値は豊胸の傾向となり、“flapper”は「セーターガール」にとって代わった。“flapper”が強調した平

坦なボディラインとは異なり、彼女たちは身体の曲線を際立たせたセーターを身に着け、豊満な胸の形をした胸当てを作り出した。当時の欧米社会の審美追求と類似して、この時期の中国の都市女性は同じく健康で美しいボディと豊満な乳房を追求しはじめ、カールした髪は1920年代よりも長く、ボディラインを強調した旗袍を身に着けた。ついに「モダンガール」が“flapper”に代わって歴史舞台にあらわれた。

概して、本博士論文執筆者は歴史学の訓練がしっかりなされており、歴史学の規範に従って博士論文を執筆している。論文のテーマに関する中国語、英語の先行研究に対して細部に至るまで調査、精読、検討をし、参考史料についても同様に漏れなく調査している。テーマに関連する一次史料や、同時代に発行された中国、日本の関連する新聞や雑誌、著述などといった紙媒体のほかにも、映画映像資料、新聞雑誌の画像資料をも参考にして、映像学、図像学の理論を用いて映像や図像を解読しており、論述に膨らみを持たせている。この他、筆者は欧米の史学理論や文化理論にも精通しており、その理論は論文中の論述に吸収されており、行間で目立つようなぎこちない理論にはなっていない。論文の構成は非常に厳密で、論述は論理性を深く備えている。

審査結果：

口頭試問は2024年1月23日（火）午後1時00分から質疑応答を含めて午後3時までM406教室にてオンラインで行なわれ、何悦馳本人と審査委員として主査の黄英哲、副査の塩山正純、唐燕霞の3名が参加した。試問終了後、引き続き3時20分まで審査委員によって審査会議を行なった。試問の冒頭に、まず本人による同論文の内容説明（ＰＰＴ使用）を行なった後に質疑応答を行なった。質疑応答の中では、審査委員から主として以下の指摘があった。

・“flapper”の新概念が生まれたのは恐らく二十世紀初頭のイギリスで、1910年頃には何さんが論文で記述するように、英国においてすでに概念語として定着している。また、新語彙創造の当初は女性の解放を表象する褒義のみであったのが、中国に移入される当時には貶義も生まれていたが、中国には褒義のみが伝わったのか。論文では1914年に*North China Daily News*が中国国内で初めて“flapper”に言及し、英文メディアでは陸続と扱われているようであるが、当時の中国国内の英文メディアの読者層に中国人はどの程度含まれていたのか、メディアは誰に対してどのような記事の中でこの“flapper”の新概念を伝えようとしたのか。当該年代（1910年代）に

“flapper”的な文化、ファッションの流行の兆しは見られたのであろうか。また“flapper”の概念は当時の中国語でどのような漢字語として訳出され中国社会に受容されたのであろうか。

・下着着用の習慣が変化する様子を、上半身の下着を対象として詳細に考察している。一方で、下半身の下着については興味の対象外であったのか？この時代は、日本女性が下着（パンツ）をつけるようになったのと同時代であり、同時代の東西文化交流に伴う文化変容の事象として、下半身の下着についても、日中対照の観点からの考察があれば読者がより把握しやすいのではないか。

・「モダンガール」は原語音のカタカナ表記であり、中国語の“摩登女郎”は音訳語である。これ以前の“flapper”の概念については、中国語、日本語ともに、漢字語或いはカタカナ語の語彙としては定着しなかったのか？

・博論では、広告に「“現代男子的選擇配偶，他們無不以對方的‘體格健全’為第一標準”，而“蓋女性體格健全與否，只要看他們的乳臀兩部即得”」とあるが、これは男性による男性的価値観が表出したものであると考えられる。その価値観（願望）にモダンガールが応えようとしているならば、元々“flapper”の開放的、自発的な概念から出発し変化、発展していく中国的モダンガールのあるべき姿との間に価値観のずれが生じてはいないであろうか。

・民国時期の「束胸」とそれ以前の「纏足」に関連性はあるのか？その時代の社会主流の「審美」選択方向はどういうものだったのか？また、いかに女性の視点から「束胸」、“flapper”、天乳運動を見るのか？

本論文には以上のような指摘がなされたが、それに対して何さんの応答は非常に適切であった。研究の発展の可能性と新鮮な研究の枠組、新文化史研究の新しい試みの点で評価に値する。課程博士学位請求論文として一定の水準に到達していると判断できる。よって審査委員会は本論文を博士学位授与に値すると判断した。

以　上